
大人の本音

西尾優璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大人の本音

【Nコード】

N 6 6 3 3 H

【作者名】

西尾優璃

【あらすじ】

暴力教師となつて高校を辞めた真那の父、進藤道重だったがやつのことで街中のある塾で働くことになるがそこに通っている生徒の親が個人情報を知られてしまつて仕事なくなる危機に！？学校でもクラスにその親の子供が転入して来てバレル危機にも…！？

プロローグ

父さんは、高校教師をやっていた。

しかし、それは過去のことになっていた。

その理由は暴行で父さんの担当の生徒が校長先生に「学年で一番成績が悪かった者は即退学だ」と言われ殴ってしまい、父さんはそれを止めようとして無意識に自分もその生徒に手を出してしまっていたからだ。

その後、その生徒も父さんも高校を辞めたのは言うまでもない。

母さんは、辞めた日の夜に荷物をまとめ家を出て行ってしまった。何も言わず、置手紙さえ書かずにたった1人で。

現在は、1年間仕事を探し歩きやつとまともな仕事をしている。1年間努力して見つけた仕事は、街中にある小さい塾であった。あんなに努力したのと思うが、父さんは今年で40歳なので雇ってくれないのは当たり前だがこれでいいのだと思う。

そんな父さんの名前は、進藤道重という見るからに渋い名前だ。そして、今まで父さんを紹介してきた自分が進藤真那（主人公）で長女。

上に兄が1人と下に双子の弟妹が2人いる。

こう考えると、よく1年ももったなって感じがするのだが…。

こうして私たち5人家族の生活が今日も1日始まるうとしている。

遅刻

（バシッ）今日も部屋中にハリセンの痛々しい音が響き、その直後目覚まし時計もなった。

また叩かれたのかと気づくのは、叩かれたところがジンジンと伝わってきた時だ。

「イッタイな〜！なんでいつも自分ばかり叩くわけ？」と言うのは、毎度毎度叩かれる長女の真那（自分）だ。

「なんでっってお前が皆より寝付きが悪いからだ！」

父さんは、さっき叩いたハリセンを持って自分の目の前で仁王立ちしながら言った。

「はあ？そんなことで？第一皆だって寝つき悪いよ！！」

「いやお前のほうが悪い！父さんだっていい方だぞ！」

自分で言うなと返しながら起きると、さっきまで寝ていた3人がてきぱきと学校に行く準備をしている。

畜生、自分たちだけいい思いしやがって！！

怒りの感情を押し殺して自分も支度をしなければと思い、時計を見た。

7：50になるところだった。

ヤバいこのままじゃ遅刻すると思い、父さんとの無駄話をしたことを後悔した。

今日も朝食抜き、髪もボサボサ、制服もボタンをかけ間違えながら家を出た。

遅刻なんていつものことだったが、高校内申についてしまうと聞いてもうしないと誓った。

「父さんと話すところなるから嫌だ、皆も置いて行くことないだろう！」と学校が近くなると今頃独り言を呟く自分がいた。

走って走ってやっと門まで着いたが、着くと先生が立っていて門を閉めようとしていた。

「もうチャイムも鳴ったぞ、早く教室へ行きなさい」

返事をして時計を見ると8:25になっていた。

誤解しないでほしいのは決して足が遅いわけではない、距離があるだけだ。

遅刻だと実感すると教室まで走って行った。

母の本音

教室に着くと教卓の前に先生がいて後のドアから屈みながら入ろうとしたら、早速見つかつてしまった。

「進藤、またお前は遅刻か!？」

先生の呼びかけでクラス皆の視線が自分に来た。

「えっと…すみません…」

そう言っていると教室から笑い声が響いて、笑い声と共に10分休みになった。

さすがにこればかりは、顔から火が出そうになった。

「お前また遅刻したのかよ?」と話しかけてきたのは、クラスメイ
トの藤木基和だった。

「今日は、頑張った方なんだけどね…父さんとの無駄話で…」

「そういえばさあ真那のお父さんって塾経営してるんだよね?」

今度は、幼馴染で親友の飯田咲希だった。

「いやあ経営はしてないよ…ただ雇われただけだと思っよ?」

「へえそうなんだ!てつきり経営してるのかと思ってたよ、でも前はどっかの学校で教師してたんだよね?」とちよつと質問攻めをしてきた咲希。

こうやって父さんの事をよく訊くのはよくあることだったが、これ以上しゃべってはいけないと思い、話を反らそうとしたのだが藤木が「ふーん…初めて知った、でもなんで親は頭良いのにお前自身は馬鹿なんだ?」と話を広げて一言多く言った。

「うるさいな、大きなお世話だよ!確かに兄弟の中でも馬鹿だけど
…」

双子の弟妹よりも馬鹿ってことになる。

「父さんは、体育専門だったし…頭使うやつじゃないし…」と口を

滑らしたと思い、言うのを辞めた。

「もういいじゃん！！辞め辞めこんな話！」と話を反らすではなく話を撤回した。

父さんの話をしたくないのは、話したくないではなく話してはいけないからである。

理由なんて決まっている誰にも話してはいけない、先生につもクラスメイトにも親友にも話していけない。話したら自分の前から誰もいなくなるんじゃないかと。

だから自分たちは、あの事件の事を何も話さない。

母さんのようにいなくなるんじゃないかと思ったから。

事件前は、母さんがいたのだ。

だが、事件前でも母さん父さんは喧嘩をしていた。

理由は知らないがもうその時に父さんに冷めてしまったのだろう。

母さんは父さんばかりでなく、自分たちも置いて行ったが子育てに疲れたのかただおいて行ったのかは、自分たちは知る由もない。

だが、出て行ったことが母さんの決意・本音なのは、間違いない。

仕事消滅の危機！？

母さんが家を出て行った理由は、謎なのだが父さんとは別れるつもりだったのは間違っていないと確信していた。

そんなことを思いながら、授業で先生に当てられ問題を解き間違いつつながら、帰り道で犬の尻尾を踏んで逃げながら学校での1日が終わった。

家に着くと何やら胸騒ぎがした。

家に入るといきなり体当たりという風に芽衣（次女）が突っ込んできた。

何と元気なことだろう、でも体当たりなんて小学校で卒業してほしい（あと1年で中学校である）

「何すんの！馬鹿！！」と突っ込んできたままの格好で全く動かない芽衣を肩をを掴んで退かそうとすると「姉ちゃん…」と泣きべそを掻きながら今度は、しがみついてきた。

どうやら自分の予感は的中したようだ。

「どうしたの？何かあったの？」

「お父さんが…お父さんが！！」

叫ぶように言ってきたがお父さんとしか言わないので何があったのか分からないので、芽衣を落ち着かせると皆がいつも揃うリビングに行った。

中に入ると、兄妹全員揃っていた。

だがいつもいる父さんだけがいなかった。

皆が皆暗い顔をしていて沈黙が続く。

「何？皆どうしたの？そんな暗い顔しちゃって…」

今度は、皆に疑問をぶつけると圭吾（長男）が重い口を開いた。

「…父さん…仕事辞めさせられるかもしれない。」

その一言を聞いて自分は驚愕した。

圭吾は何かを言おうとして改めて自分の顔を見たが、視線を床に向けて俯いてしまった。

きつと自分は今人生で一番顔が強張っているのだろう。

「何で…やつと1年も頑張つて探した仕事なのに…」

「暴力教師だつてことがばれたんだよ、それも塾通つてゐる生徒の親に」

慶（次男）が冷静に言った。

「…何で…誰にも言つてないはずなのに…」

「俺らだつて言つてねえよ…第一言いたくねえしな」

じゃあ何故だ？と疑問を持ったがそれは一瞬にして無くなった。

「…個人情報とか調べられたんだろ、きつと」

「あ…」とその一文字で何も言えなくなった。

「それにその親、超人の個人情報とか調べんの趣味になつてゐらしいし、自分の子供が通つてゐる学校の教師や生徒の事とか色々調べてるらしい」と自慢げに慶が言った。

何でそんなこと知つてんだ、お前は…という視線を送った。

「と、とにかく父さん今は多分その親と話し中だと思つよ」と話を変えた。

最後に違う学校でよかったーなんて事も言った。

親の一大事によくそんな事が言えたもんだ。

圭吾はまだ俯き状態、芽衣もまだ泣きべそをかいていた。

自分は父さん大丈夫かな…と思つていた。

自分たちはその日ただただ父さんの帰りを待つだけだった。

感情

父さんが帰って来たのは午後9：45で自分たち兄妹は“9：00には寝ること”と父さんからの原則があり、1人でも原則を破ると連帯責任として罰を受けることになる。

その罰は朝食と夕食を食べれないという事だ。

罰を受けることになるとその日は昼飯しか食べれないということにもなる。

ちなみに高校生の圭吾は買いパンを買って食べているのだが買って食べるのは、それだけしか出来ずお菓子を買う事も味のある飲み物も禁じられ水のみ許された。

どうして、こんなに頑固な鬼になってしまったのか…。
このぐらいで原則の話は置いてこう。

「父さん!!」

ドアを引く音がして自分は寢室を飛び出し父さんの所へと向かった。
「お前、まだ起きてたのか…？」と父さんは低い声で言った後一息吐いた。

いつもなら、怒鳴るところだが父さんも今はそんな気は無いらしい。

「…仕事辞めさせられちゃうって聞いたから…」

「ああ…ごめんな心配かけて…実はな、今月いっぱいで辞めることになった…」

「え…」

その一言で言葉が出なくなった。

何故だ、暴力教師だったのはもう過去のことなのに…。

それに父さんはわざとじゃないし殴る気もなかった。

なのに…なんでと思う内、自然に自分の瞳に涙が溢れていた。

「泣いてんのか？」

父さんの驚く声が部屋中に響いた。

まるで起きてしまうんじゃないかと思うくらいに。

それでも私は感情を抑えきれず父さんに宥められながら泣き続けた。

その後、無意識に眠ってしまっていた。

父の決断と圭吾の一言

翌日の朝午前6：50、自分は自然と目が覚めた。

昨日の夜の話は何故皆が辞める事を知っていたのかだけを聞きそれは圭吾の携帯にメールをして知らせたらしいがそれ以上の事は、話さず無意識に出た涙を止めることが出来ずにいてその後の事は全く覚えていなく父さんがベットまで運んで来てくれたの分かった。

ベットから起きるといつも自分より早く起きている芽衣が寝ていた。部屋は自分と芽衣は一緒に部屋で圭吾と慶と一緒に部屋という、男女別である。

芽衣の顔を見ると、昨日泣きましたという証拠で目が腫れていた。そんな芽衣の顔を見てみると自分の目も腫れているのだろうと思い、洗面所へ向かった。

洗面所の鏡を見ると予想通り、腫れていた。

今になってあんなに泣かなきゃよかったなどと後悔したが今はそんな後悔などしている場合ではなく、急いで目を濡れたタオルが何かで目元に当てて目を普通に治そうとした。

数分経って、目がほぼ完全に治ったと思ったところで学校に行く支度した。

時間は7：25で皆が起き出した。

今日、初めて思ったのだが、なんて自分の家族は暢気なのかという事だがこの兄妹の中で一番寝起きが悪い自分にまた今頃になって呆れ驚いた。

ボーツとして歩いていると「姉ちゃん、どうしたんだよ？誰よりも先に起きてるなんて…熱でもあるんじゃないの？」

慶が眠そうにして部屋を出て来ると頭掻いてそう言った。

そして話したら話したらで大欠伸をして近くにあるトイレへと駆け込んだ。

挨拶ぐらいしろと言いたいところだった。話をしている場合ではないと思い、慌ててリビングに入ると小さいメモのような紙があった。その手紙の内容が次のようなものだった。

みんなへ

昨日は突然仕事を辞めるなんてメールで言っでごめんな
父さん昨日は諦めて塾のためにも素直に諦めようと今月
で辞めようと思ったけど、やっぱりもうみんなに心配掛
掛けたくないの、もう一度頼んできます。
朝食はテーブルにあります。

父さんより

読み終わると、メモを持って圭吾と慶の部屋へ向かった。

自分は「これ、見て!!」とノックをせずに入ったがもう既に支度を終えている二人がいた。

「なんだよ？父さんは？」と不機嫌そうに慶が言った。

「これ、父さんが書いてったメモ」

メモ差し出すと、慶より先に圭吾がメモを受け取った。

「…父さんを信じる、今日は皆学校に行け」

圭吾が冷静に自分の顔を見て言った、それは自分に言ってくれた様な気がした。

その一言に「はーい!!」と妹が返事をした。

いつの間にかいたのかと思うほど気配がしなかった、お前は瞬間移動も出来るのか？

不機嫌そうな顔をしている慶も頷き、自分も深く頷いた。
こうして自分たちは朝食を食べ終え学校へと向かった。

突然の転入生！？

自分が学校に向かっていると、同学年か先輩か後輩か分からないが走りながら登校しているのが見えた。

そういえばいつも遅刻していたから人が登校しているのを見るのは久しぶりだ。

なんて思ったが「こんなこと思ってる場合じゃない！走らないと間に合わない！」と我に返って自分も後に続くようにして走った。

校内に入ると、チャイムが鳴り始めたが階段を登るのが辛く足が止まってしまった。

やばい！このままじゃまた遅刻だ！！

やつとの思いで教室がある階まで登りきり、教室までダッシュで行った。

チャイムは鳴り終わりそうになっていたが、なんとか席に着いた。

先生は、まだ来ていない。

「よかった…」

「…お前がギリギリセーフで教室に着くなんて珍しいな」

着いてそうそう話しかけてきたのは、隣の席の藤木だった。

「自分だってやる時はやるよ、それに今日は兄妹達より早く起きたんだから！」

「じゃあなんで、こんなギリギリなんだよ？」

「それは…」と自分は理由を言おうとしていた。

「あんたには関係ない」

口を滑らせたと思い、言っのを辞めた。

「なんだよ…だけどさ、お前も謎だしお前の家族も謎だよな…」

謎？何の事だ…？藤木は何故そう思う？自分は、ただ父さんの事を秘密にしているだけだ。

「そう…ただそれだけ…」と何故か思った事を口に出していた。
「は？」といちいち疑問を抱く藤木に対して「なんでもない！」と叫ぶよう大声で言った。

「何がなんでもないんだ？」と言った途端、疑問の声。
前を見ると、もう先生が教室いた。なんで気付かない自分！

「えっと…なんでもありません…」

自分の声はさっきの音量はどうしたと言いたくなるほど小さくなっていた。

「遅刻を免れたからといって大声をあげていいなんて言っていないぞ」

「はい…」と言いながら隣に視線を向け藤木を睨んだ。

藤木はフツと笑み浮かべて自分を見ていた。その笑みが腹立たしかった。

先生は今日の予定などを言い終わると前のドアを開けて「そして今から転入生を紹介する」と言った。

はっ！？と自分は目を見開いた。突然すぎるな。

その一言で当然ながらも教室中は事件でもあったかのように騒ぎ出した。

先生に入るように言われて入って来たのは、如何にも勉強できるというオーラが漂っている1人の少年だった。

顔は整っている方で表情は無表情、眼鏡を掛けていて眼鏡の奥の瞳は鋭そうな瞳をしていた。

女子は目を奪われている人もいて男子の表情は何故か強張って見えた。

「静かにしろ紹介できんだろうが…林中学校から来た」と先生が言ってから「海藤祥です、よろしく」とその人が自己紹介した。打ち合わせをしたのは誰でも分かるだろう、あっさり終わった。

先生は「皆、仲良くするように」と言うと海藤って人に席を教え、教室を出て行った。

こうして、教室の中が騒ぎ最高潮に達したとき休み時間になった。

「うるさ〜い!!」

「ホントだよ…マジうるさい!!」

自分に同意してくれたの咲希だった。

「なんだよ、お前ら…あいつの所行かないのかよ？」

藤木が呆れ顔で言ったが自分は「なんで？別に理由なんてないよ…あんたが行ってくれば？」と返した。

「なんで俺が…」

「それよりさ、よく遅刻しなかったね？真那。でも大声出したのはいけなかったね…また藤木が原因でしょ？でもあの人よりまだ藤木の方がいいな！」

咲希が一人で話を進めにつこり顔で言った。

マシと言われたので腹が立ったのか「お前なんかマシとか言われたくない！」と藤木。

「こつちだつて御免だよ!!」と咲希。

二人の会話で自分は自然に笑っていて父さんの心配していた気持ちも吹っ飛んでいた。

その笑い声につられたのかチャイムが鳴り、授業が始まった。

だが、あの転入生が自分と関係することになるとは今の自分は思ってもいなかった。

誘いと尾行

「今日はここまで、宿題を忘れないように！以上」
授業が終わるのは、いつも先生の“以上”で終わって号令などかけない。

先生が面倒だと言いしなくなったのだ。

今日は藤木と咲希に笑わせてもらったので楽しい思いが出来、父さんの心配などしなかったと言ってもよかったがそんな自分を悪い人間になったのかななんて思った。

授業が終わると帰りになるのだが、会なんて事もなく先生が面倒だと言つて自由に帰らせている。なんて自由なんだと思うが先生が何もしないだけなのだがそれなら教師を辞めろという気になる。
まあこんな事どうでもいいのだが。

「さあ帰ろう！」と言つてきたのは咲希だった。

自分は「うん」と返事をして帰ろうとした。

「進藤さん」

だが不意に誰かに話しかけられた。

声の主は転入生の海藤祥だった。

「ちよつといいですか？」

海藤は何故か敬語で話し、表情は今朝と変わらず無表情でちよつとずれた眼鏡を掛け直した。

「な、何？」と自分は訊いたが要件より女子の視線が気になり、チラッと視線の先を見ると冷たい眼で見返して来た。

「ここでは話すのは無理なので、お時間良いですか？」と海藤は丁寧な敬語で訊き、そのしゃべり方は本当に中学生かと疑問を持ってしまっただ。

自分は咲希と一緒に帰れなくなったと言い、女子の視線を避けて海藤と一緒に教室を出た。

二人が出て行くと、藤木もその後を追うように教室を出たので慌ててそれを咲希が走って藤木の腕を掴んで止めた。

「ちよつと！どこ行く気？」

「あの二人を尾行すんの」

「はぁ！？」となんでと訊く前に藤木の顔が真顔なのに気付いた。

尾行なんていけない事だと思い、止めたかったのだが顔は何故か真顔でその真顔に何も言えなくなった。

そんな咲希が掴んでいた手の力が弱くなった瞬間を突いて藤木は咲希の手を払い除けもうスピードで走り出した。

咲希は「もう！！」とが呆れて言うたバッグを強い力で握りしめてから藤木を追い駆けるように走って行った。

突然の告白と盗み聞き

自分は授業が終わりすぐに家に帰ろうと思っていた。午後には皆も帰って来ているはずだ。

すぐ家に帰ろうとした理由は父さんの仕事の心配がまたすぐに込み上げて来たからで、こういう時に携帯があれば父さんからのメールが来てどうなったのか分かるが携帯は父さんの原則で高校になってからでないと持つ事は出来なかった。

だから今は兄妹の中で、高校生になった圭吾がやつと持ったという感じである。

海藤が自分を連れて来たのは、学校のすぐ近にある公園だった。まだ午後の3:00ぐらいなのに公園には大人はおるか子供さえもいなかった。

「まあここら辺でいいでしょう」

海藤はそう言うと言鏡を外し、ベンチに座りわりもせず、立ったまま自分の顔を見て改めて話の内容を言った。

「話の内容つてのは君の父親の道重つて人の事だ。」

突然敬語を言わなくなり、海藤の話に父さんの名前が出た事に自分は驚きを隠せなくなった。

「え…」

「君の父親は俺の親が原因で仕事を辞めさせられそうになっている。自分は目の前にいる海藤が何を言ってるのか分からなくなった。」

「…あんたの親が…じゃあ、趣味で人の個人情報勝手に調べてる

人って…」

自分が慶が言つてた事を思い出して言う和海藤は口元を緩めて笑みを浮かべた。

「へえ、もう噂が広まってるんだ… そうだよそれは家の親だ、なんでも知ってる君の事も家族も友達もあの学校の人なら全員ね」

まるでさっきの無表情・敬語が嘘のようになり別人のようだった。

自分はその微笑みでこの人は敵かも知れないと思った。

「…それなら、あんた家の父さんが暴力教師だって事は知ってたよね？」

自分の声は明らかに暗くなっているが分かる。

「ああ… 知ってるよ？ でもそれは事故だったって事もね… 最初、廊下で待つてる時に君の名前が耳に入ってきて来て正直驚いた」

だから名前を知ってたのか… だけど何故事故って事を知っている？ 個人情報には事故なんて書いあるはずない、生徒を殴り怪我をさせた暴力教師など書かれているのだろう。

「なんでわざとじゃないって知ってたのか疑問に思うか？」

心を見透かしたかのように海藤が言った。

自分が頷くと海藤は話し始めた。

「ちょ、ちよつと待つてよ…！」

咲希はやつと藤木の姿を見つけて叫んだ。

「なんで、お前まで来てんだよ！ お子様はお家に帰れ」

「なっ！ あたしだって真那に何かあつたら困るの…！」

「俺は進藤と海藤って奴との会話が聞きたいだけ」

「はあ！？ 聞いてどうすんのよ…！」

てつきり心配して追い駆けてるのかと思ったが、勘違いだったらし

い。

それに尾行なんていけない事だと思っていたのになんで自分まで走ってしまったている。

だが、もうあの二人の姿はなくてこれはもう尾行ではなく、こうなってしまったている。

藤木↓真那・海藤

→

咲希

解説は藤木が二人を探し、咲希が藤木を追い駆けるという感じになっ
てしまっている。

咲希が変な事→を考えていると急に藤木が「おっと」と言って足を
止め、視線をある公園へとやった。

咲希も足を止めて藤木の視線を追った。

そこには、何かを話している二人がいて何故か真那は深刻そうな顔
していて海藤さんは眼鏡を取っていた。

「よし！盗み聞きしちやお」

いかにも楽しそうに弾んだ声で藤木は言い二人に見つかからないよう
に近づいて行った。

「ま、待ってよ！」

咲希も藤木の後を追うように近づいて行った。

話の内容がどれほど深刻かも知らずに。

海藤祥の対談と行動

「ホントに、こんな事して良いの？」

咲希が困惑気味にそう言ったが藤木は咲希の言葉を無視し、人差し指を立てて静かにという仕草をした。

咲希は何かを言おうとしたが二人と自分との距離が一気に近くなった事に気づくと、慌てて手を口に当てて声を押し殺した。

藤木は話している二人に気づかないように声が聞こえる程度に距離を取って、公園の茂みに隠れた。

咲希も良いのかと戸惑いながら茂みに隠れ、二人の話を聞くことになった。

真那、ごめんと心の中で叫びながら。

海藤は「あんまり沈黙のムードになりたくはないんだけどね、話すよ」と言い自分の顔を見つめて来たが、その眼力は何かを訴えているとも言ったようだった。

何故、自分を見つめてきたのは分からないが自分はその眼力に負けて目を反らした。

そ直後に海藤は自分が反らすのを待っていたかのように話し始めた。この人の中での決まりというのがあるのだろうか？

「俺の親は君の父親と同じ高校で働いてたんだ、だけど働いていたのは母親で、君の父親を辞めさせようとしてるのは父親なんだ…当然、母親は君の父親が暴力教師って辞めさせられよとしているのを知って真実を父親に話したんだ…だけど父親は母親の話は嘘っぱちで決め付けた。でも耳を傾けないのはいつもの事だったから今回は何回も言えば信じるんじゃないかと思ってしつこい程言ってた。だ

けど父親は仕事を一緒にしていたからって庇うな、なんて言った。さすがに母親ももう何を言っても無理だと思ってしまうてさ、要は君の父親を見捨てなんだ。かつて一緒に仕事をしていた人を…こんな話、聞いて許せなくなったんじゃない？」

海藤は話終わると、自分の返答を待った。

自分は「…全然、むしろ感謝…かな？」と言った。

「は？」

海藤は自分の返答に啞然としたがそれよりも自分が自分の返答に驚いていた。

まさか、自分の口から感謝なんて言葉が出るとは思っていなかったが嘘は言っていないとも思う。

「いや…だって真実を言ってくれたんじゃない？それって家の父さんにとっては、どれ程嬉しい事か…」と言い終わった瞬間、自然に涙が出ていた。

「え…」

海藤の強張った表情が歪んで見えた、それが涙のせいと分かった時にはもう涙が止まらなくなっていた。

「…ごめん…泣くつもりじゃなかったんだけど…本当にごめ…」と言いつつ終わる前に何かが起こった。

自分にも何が起こったのか分からなかったがそれは時間が経つにつれて、それは海藤に抱き締められている事だと気づいた。

「え…」

自分はこの状況にどう対応すればいいのか分からなくなった。ただ驚きと共に涙が止まり、思考も停止していた。

海藤は何も言わず自分を抱き締めただけだった。

「え…」と藤木が小声で言うと、そう後は絶句した。

「…」と咲希も目を見開き絶句。

二人の話を聞く目的で来た藤木と真那を心配して来た咲希だったが海藤の話と行動に二人同時に絶句した。

父さんの所へ

海藤は自分の表情を伺うように見下ろすと、抱き締めていた腕を緩めて解放した。

だが、自分は恥ずかしくなってまともに海藤の顔が見れくなり、赤面した。

海藤は「いきなり、抱き締められて驚いた？」と自分の顔を見て悪戯っぽく笑って言った。

「俺だって、いきなり泣かれたから驚いた。それで、抱き締めたら泣き止むかもって思ってた抱き締めた…理由はそれだけだけど、もしかして好きになっちゃった？」

この人は本当に人間として分らないが、学校では猫をかぶっているに間違いなく、家族の事も何も思っちゃいないだろう。この話をしてくれたのもただの雑談だとか言いそうだ。

「そんな事ないよ！…涙だってただ嬉しくて止まなくなっちゃっただけだし」

「話変わるけど、父親もよく憎まないよな？君って単なるお人好し？」

「違うよ！確かによく言われるけど…」

自分は断言したが、海藤はまだ笑っていたのでムカついた。

自分は「そういえば、今朝父さんが塾に行ってやっぱり辞めさせないでほしいって頼みに行った」と話をこっちから変えた。

「へえ…そーいや、電話で今朝は仕事が忙しいって事で話は夕方にしてほしいって言ってたな。もう今頃、塾で話してんじゃないの？」

「え？嘘？それ早く言ってよー！」

それを聞くと自分は公園の出口に走り出した。

「おい、どこ行くんだよ!!」

「塾に行くの、決まってるじゃん!!」

「ちよつと待て!」

海藤が慌てて叫びながら自分を追い駆けて来た。

海藤は「俺も一緒に行く」と言った。

自分は何故だろうと思いつながら、走り出した。

「…行っちゃったけど、どうすんの?」

二人が抱き合う間の時間、沈黙になったのは咲希も藤木も一緒に沈黙後に話すのはこれが初めてで先に話し始めたのは咲希だった。

「追い駆ける…」

藤木が話始めたと思ったらその一言目で驚かされた。

「はあ!? 何言ってるの? ストーカーじゃないんだから!」

「じゃあ、さっきのさ、だ、抱き合ってたのはどう言うんだよ」

藤木の動揺さを見てやっぱりさっきの抱き合ってたところが気になるか。

「あれは泣き止むようにって」

「だからって抱き締めるか!? 普通! 頭おかしいだろ!!」

藤木の訴えには同感だが海藤の話本は本当なのか? 気になって仕方がない…。

咲希は「追い駆けるよ」と言った。

「え?」

突然、さっきと言ってた事が違うと思って驚いた。

「ほら、立って！言ったでしょ、あたしは真那が心配なだけだしあんな猫かぶった奴と一緒になんてあたしが許さない」

咲希は言い切った。

その言葉を聞いて藤木もにかつと笑い、立ち上がって「お前の友達思いも半端じゃないな」と言って咲希と笑い合った。

「行こう！」それが合図かのように二人も走りだした。

到着

自分は他の事は考えずにただ塾へと走っていた。
父さんのために父さんを助けるために。

「ちょ、ちょっと待て！お前、足速過ぎ！！速度落とせ！」
海藤が息切れしながら、前に走っている自分に言った。

「こっに見えて、足には自信あるんだ！」

自分は振り向かず前だけを見て、自慢げにそう言った。
その理由は1年の頃から今まで毎日遅刻して走っているから慣れしまったのだろうという事だ。

だから、「もう毎朝ジョギングしている程、日課になってます」と言っても良くて体育大会ではリレーの選手になり1位を取れる程にもなった。

なので、体育では+の方へで内申では-方へと進む。

「あ、見えた！」

余計な無駄話(?)をしたところで塾の目印となる看板が見えた。
看板には“個別・クラスでも最高の学習方法を教えます”と書いてあった。

「着いたけど、どうすんだよ？」

「…とりあえず、皆に伝えるよ」

「は…？皆って兄妹にか？伝えてどうすんだよ？」

海藤の質問を聞かずに自分は塾の真正面にあつた公衆電話に向かった。

だが、入った瞬間お金がない事に気づき、ポケットに手をつ込むと何故か30円が入っていた。

それは、この間咲希と一緒に学校帰りに先生や同じ学校の生徒にばれないようにコンビニ向かってお菓子を買った時のお釣りだった。自分は兄妹などに見つかったら、真っ先に父さんに言いつけられるので辞めようと言ったのだが、咲希が大丈夫と言うので買ってしまったのだ。

幸い、誰も見ていなく無事に買い終えたが今になって咲希に感謝である。

「この30円を使っているのか？」

自分は今更ながら戸惑った、あの兄妹は鋭いので自分が忘れた頃に「なんで、金持ってたんだ？」なんて疑問を持たれそうだ。

だが、今はそんな事思ってる場合じゃない！

自分は思い切って電話を掛けようと30円全額入れ、電話番号を押した。

掛けて数秒すると「はい、進藤ですけど？」と、まあ礼儀正しい（？）言葉遣いで誰かが出た。

低い声の奴だったがこの声は慶だと分かった。

「もしもし？慶？」と自分が訊くと、その一言で「姉ちゃん？」と気づいてくれた。

「今どこいんだよ？皆、心配してんぞ！」

「ごめん、実は皆に頼みがあるの。今塾に来てて、これから父さんの所に行くの！だから皆もこっちに今すぐ来て！」

「はっ！？なんで？皆で乗り込むとか言うなよな」

「ご名答！だから、皆に伝えて早く来て！」

そう言う自分から受話器を置いた。

「よし！後は皆を待つのみかな？」

「何が？よし！だよ、ここで待つってのか？」

海藤が冷めた目で自分を見て来た。

「別に、あんたも待つてなんて言ってないよ」

「お前：ここで待たなきゃ、俺が来た意味ないだろうが！」
海藤はそう言つとそっぽを向き捻くれた。

「それに俺だつて父親に言いたい事がある……」

自分はその一言に疑問を持つがそれ以上何も言わず兄妹たちの到着を待った。

兄妹集結

「お前、父親想いだな」

「…決まってるじゃん、じゃなかったらこんな所来てないし兄妹なんて呼ばない」

海藤の質問に自分は答えたが、本当は家族想いなんかじゃないかもしれないと同時に思った。

「…なんで、兄妹なんか呼んだんだよ？」

「家族で行けば、父さんの退職を撤回出来るかもって思ったの。だけどその考えは…自分たちのためだけの考えなのかもしれない」

自分は何を言っているのか？と疑問を持ったがそれ以上に海藤が疑問を持った事だろう。

「自分たちの生活とか考えただけで父さんのためなんかじゃない、ただ自分たちのために父さんの退職を撤回をしようとしてるのかもしれない」

「そんなのお前だけの思いじゃねえか、他の奴は違う事思ってるかもしれない。勝手に決め付けんなよ、父さん助けんだろ？俺も協力するからそんな事言うなよ」

海藤はそう言っていると自分の顔を見つめた。その顔は真剣そのものだった。

自分はそれに応えるように強く頷いた。

「あー！いたいた！姉ちゃん連れて来てやったよ、感謝しろ！」

良いタイミングで来たと思い、振り向くと慶が怒鳴るような声で言った。

後には圭吾・芽衣と並んで歩いて来ている。

塾に3人が近づいて来ると会話が耳に響く。

「父さん助けるぞ！たえ俺だけになっても必ず辞表撤回して見せる！」とヒーロー的な慶。

「辞表出してねえのに、どうやって撤回すんだよ…」と呆れ気味な圭吾。

「あたしだつて父さん助けるもん！！」と可愛らしい事を言う芽衣。自分は思わず微笑んでしまったが、海藤は黙って兄妹たちの方を見つめていた。

「どうかした？」

「…いや、ただ俺の家族もこうなら良いのになつて」
そう言われると、海藤の家族は意見が噛み合っていないくて。それなのに、自分の家族じゃないのに海藤は協力すると言ってくれた。

「海藤…ごめん、それとありがとう」

自分は海藤にお礼を言ったが海藤は何故謝るのかお礼を言われるのか分からない表情だ。

そんな海藤を気にも止めず「行こう！父さんを助けよう！」と言った。

返事は「うん！」と最初に返事をしてくれたのはまたも芽衣だった。

情報キャッチ？

咲希と藤木は行こうと言いながらも二人を見失い、道に迷っていたが藤木が隠し持っていた携帯電話で友達に電話して塾の行き方を教えてもらった。

“街にある塾”とまあ適当な説明で言い始めると友達には何故か伝わり、学校の正門を右とか小さい頃よく行ってた駄菓子屋の横の細い道を通るとか、藤木の適当な説明とは全然違い、詳しく道を教えてくれた。

藤木が、お礼を言って切ろうとすると「よく知らないで生きてたなんて一言多い事を言われたらしいというか“らしい”ではなく、言われた。

そんな事どうでもいいと思い、「よし、さっそく道が分かったところで早く行こう！」

咲希は携帯をしまふ藤木をよそに急ぐように言う走り出した。

「ちょっと待て！」

「何？早くしないと…」

「これ、見るよ」

咲希は藤木が何かを発見したのか視線が横に向いていたので咲希も横に視線をずらした。

二人の視線の先には掲示板があり、そこに張り出されていたものが二人の目を見開かせた。

「何これ？」と咲希。

「この人、海藤の父親？の事だよなあ…」と藤木。

そこにはあの塾の事が書いてあり海藤の父親の名前も書いてあり、塾を買い取るとも書いてあった。

「はあ？ 現在、塾に通ってる人は即刻辞め出て行きなさい。」だってありえないよ！酷い、この人」

咲希は声を張り上げ、書かれてあった言葉の一字一文字を睨んで言った。

「ってか掲示板に張らなくて自分の口から言えよ…まあ、そんな事より行くぞ」と藤木は話を切り替えて来た。

咲希は、お前から話が始まったんだろうが。とも思ったが藤木のおかげで情報が得られた。

掲示板はこしかないし、他の物と比べると紙はビニール製で新品と思われ画鋏はきちんと四つ止められていたので今さっき張られたのが分かる（ここら辺は悪い奴が多いので1日で紙がボロボロになるからだ。）

それに、この掲示板は重要な事しか書かれていない以上、誰も見ないと言ってもいいのだ。

咲希は藤木の顔を見て頷くと、二人は走り出した。

自分たちは、自分・海藤・慶・圭吾・芽衣の順で階段を登り入口のドアまで来た。

「この塾に通ってるのは俺の弟なんだ。今日は弟、来ないって言うてただけだな」

「じゃあ、その弟のクラスに行けばいいんじゃないの？」

慶が身を乗り出して言った。

ここには教室しかなく（廊下はあるが）、塾を経営するのもやつとであった。

なので、教師や子供・親の対談などは授業が終わった時や休みの日でやっている。

「まあ、いない事はないだろう」

圭吾がそう言くと、慶がいきなりドアノブを回した。

自分たち驚いたが、こんな所で突っ立っていたってしょうがないと思いい何も言わなかった。

ドアを開けると、短い廊下があり3つ程の教室と思われるドアがまたあった。

部屋は静まり返り、土足でもよかったので足音が廊下中響いた。

だが、そんな事はお構いなしに海藤は先頭に立ち一番奥の教室に向かった。

そこが弟さんの教室なのだろうと分かると、自分たちも海藤の後に続いた。

ガチャツと音を立ててドアを開くと慶の予想は的中し、父さんと海藤の父さん二人がこちらを見向いていた。

願望

ドアを開けた瞬間、自分たちと父さん・海藤の父さんが向き合う状態になった。

「なんなんだ！？お前らは！それになんで、お前がここにいる？」
海藤の父さんが目を見開き怒鳴り声を上げ、海藤に指を指して言った。

「進藤の父さんの退職を撤回してほしい」
最初に口を開いたのは海藤だった。

「質問に答えなさい、どうしてお前たちがここにいる？もし、その願望が答えなら今すぐここを立ち去りなさい」

今度は落ち着きを取り戻したのか、優しい口調で言った。

だが、今立ち去らなければもう怒鳴り声では済まされないとでも言うように。

ここで肯定すれば堪忍袋の緒がもうすぐ切れるとでも言うように。
そんな空気が教室に流れた。

父さんを見ると何故自分たちがここに来たのか、未だに分かっていない様子で自分たちを見るも、口を開こうとはしない。

「…そう…だよ、それが答えだ。だから俺たちはここに来た」

二人の会話は自分たちには大事な事なのだが、他人から見るとただの親子喧嘩にしか見えないだろう。

この会話が終わるまで進藤家は一言もいや、一文字も話さないだろう。

「なんだと……？この話はお前たちには関係ない事なんだ！大人の話に口を出すな……分かったら、とっとと帰りなさい」

「……人の話は聞けつて親や先生に教わらなかったか？」

「親に向かつてなんだ、その口の訊き方は！それに父さんは人の話は聞いてる方だ！」

今度はマジな口喧嘩になってきたが、一歩間違うと殴り合いにもなりそう。

「嘘言うな！父さんは、いつも自分以外の人の話は聞こうとしない。なんでも自分は間違つてないって思ってる。母さんの話だって嘘だと思つて聞かなかつた癖に……」

「あれは、嘘の話だ！個人情報にも事故なんて書いてなかったんだからな！あんな良い話あるわけないだろ」

この人はやっぱり趣味で個人情報を調べてんのか、噂は本当だったか。

「本当だよ！その話！あなた、自分の奥さんも信じらんないの？父さんは生徒を止めようとして、殴つちまつたんだよ！だから事故でも良いの！」

慶が突然、進藤家の第一声を発したのだが海藤の父さんより慶の堪忍袋の緒が切れた事は確かだ。

「な、なんだ？この餓鬼は！殴つた事は事実だ！」

「大体あなた個人情報とか辞めろよ、事故と変わりないんだよ！……あなたには分かんないと思うけど俺、父さんには先生でいてほしい。もう高校の先生じゃないけど今もまた先生になって本当によかつたと思つたんだよ！」

慶が良い事を言ったのは、奇跡と言ってもいいが一番家族想いなのは慶なのかもしれない。

海藤は「だからさあ、父さん自身が黙っていれば良いんだよ」と言
った。

「そうすれば、進藤の父さんだってまた働けるかもしれないだろ？
他の塾の先生がなんて言うか知らないけど、過去の事だし。…いい
加減、人の仕事取るなよ…父さんのせいで無職になった人何回見た
と思っただよ？」

海藤が困った顔で言う、海藤の父さんはよくしゃべった口を休ま
せるように何も言わなくなると何かを考えついたかのように口を開
いた。

決着（1）

「…例え過去の事でも、誤って殴ってしまったとしても…自分の子供が通っている学校や塾に犯罪者がいるのは耐えられない…だから父さんはそういう人を許さず、仕事を辞めさせてきたんだ。これは全部お前たちの為なんだぞ！！なんで分かってくれないんだ！？」

海藤の父さんは最後の力を振り絞ったかとも言うように言い終えた瞬間、膝から崩れ落ち悔しそうに床を殴った。悔しい気持ちを抑えようとしているのだろうか？

だが、この人の気持ちは最初から海藤の家族や海藤自身には届いていないのは事実である。

そんな父親を海藤は無表情で冷たい眼で見ていた。

しばしの沈黙の中、床を殴っていた手を止め今度は睨むように父さんを見たその顔は、もう憎しみでしかなかった。

「お前の…お前のせいだっ！お前さえ居なければ！」
起き上ったと思ったら、今度は父さんに殴りかかろうとした。

父さんは突然の事で驚き、後退りをした。
自分たちも後ずさりをしてしまった。

「おい、父さん辞めろよ！犯罪は許さないんじゃないのかよ！
？殴ったら父さんも犯罪者になっちゃうんだぞ？」
海藤は目を見開き、一歩前に出たが海藤の言った事など耳に入っていないようだった。

「辞めて！」

自分は父さんの前に立ち両手を広げて通さないようにしたが「邪魔だ！」と言われ右手を掴まれ左側に投げつけられた。

投げつけられた自分を海藤が支えるように受け止めてくれた。

次の瞬間、ガタンツという音と共に埃が宙を舞った。

父さんが殴られのだろうと思い目を瞑ったが、その音は逆で父さんが海藤の父さんを背負い投げした音だった。

その衝動で机や椅子なども倒れていた。

自分と海藤は固まったまま動けなくなっていて、兄妹たちも教室の入り口で立ったまま動かなくて沈黙状態である。

響くのは、父さんの息遣いで投げ飛ばされた海藤家の大黒柱は倒れたまま、また床を叩き「くそ！くそっ！」と呟き出した。

自分は父さんが元・体育の先生だった事を忘れていた。それに担当は柔道だったけ？

だけど、背負い投げって…避けてから余裕があったのが、よく分かるのだが…。

「と…父さん、すげー！」

慶が兄妹中で初めに答えるのはいつもの事だ。

「ご、ごめん！海藤…ありがとう」

自分は我に返って海藤から離れた。

「ああ…」

海藤の父さんはプライドを傷つけられ、もったいの落ちこぼれの間のような人。

「父さん、もう諦めて一步間違つたら父さんも犯罪者の一人だったんだ。…さつき父さん、なんて言つた？自分たちを守る為に人をクビにしてたんじゃないのかよ！？」
見損なつたよという海藤は言つた。

それに負けじと「そうだよ！」と大声で叫んだのは慶。

「もう、巻き込まないでほしい」とまた呆れ気味で言つたのは圭吾。
「父さんを救つて下さい」と頭を下げて言つた芽衣。

救つてくださいつて…おいつと言いたかつたが、突つ込む理由も無い為それは置いといた。

最後に「父さんの退職を撤回してください！」と改めて自分が言つた。

自分たちは精一杯な思いで頼むと海藤の父さんはむくつと起き上がり俯きながら口を開こうとした。

その時だつた。「撤回してくれんなら、ついでにこれも撤回してくれる？」

廊下の奥で誰かが叫んだ。

決意（2）

その声に全員が反応して、廊下に立っている兄妹たちが横を向き、自分や海藤は驚き目をきよるきよるさせた。

声は低くもなく高くもなく、一言目でまるで探偵気のような口調だ。でも自分はその声には聞き覚えがあった。

その声の主は「よっ！」と部屋の前に来ると兄妹たちを無視し、自分を見ては頭の前で手を振って挨拶をして来た。いつも会っては自分をからかい馬鹿にする、藤木基和だった。

「ちよつと、待ってよ！」

その藤木の脇に息を荒くして遅れやって来たのは幼馴染で親友の飯田咲希だった。

二人も制服姿だった。

「な、なんで…藤木が…？それに咲希まで…」

驚きで声が掠れた、そんな自分を藤木は「まあ、まあ、そう慌てなさんなつて」と言った。

「な、なんだ貴様らは！」

海藤の父さんは突然やって来た、二人を見て指を指した。

「別に名乗るほどの者でもねえよ、ただの通行人だ」

藤木は最後に一度言ってみたかったんだよねえと呟いた。

通行人と自分は疑問に思ったが、藤木が言った直後に咲希が「何気取ってんのよ！それに通行人じゃない！」と突っ込みを入れた。

この二人は夫婦漫才師かとも突っ込みたかったが、辞めて置いた。

「改めて本題に」

そう言つて藤木はコホンツとわざとらしい咳をしてから話始めた。

「実は掲示板にこの塾を買い取るつて書いてある紙を見つけて、その買い取る人が海藤の父さんだったから、知らせないと思つてさ」

藤木はポケットから折り畳んだ紙を出し広げ、自分たちに見せた。

紙には、塾に通う生徒は今すぐ出て行けと書いてあり、責任者も海藤孝明と書いてあった。多分、海藤の父さんの名前なのだろう。海藤の父さんはその話に目を見開いた。

「……塾を買い取るなんて聞いてないぞ！何一人で決めてんだよ！それに出て行けなんて、あんまりだつ！！」
海藤は自分の父親より藤木からその紙を受け取ると、ビリビリに紙を破いた。

「……」

海藤の父さんは何も言わなかった。
ただ海藤を見ているだけだった。

「……父さん……俺は父さんを許さないっ！これ以上勝手な事したら、親子の縁を切る……いやなら、撤回しろっ！」

そこまで言つてしまふかと思つてしまふが、海藤は本気だった。

「……分かつた……」

海藤の父さんは海藤にこんなにまで言われるとは思わなかったのだらう。

あさつり言つたら悪いが、自分たちの訴えを了承してくれた。

「家の父がすいませんでした。」

海藤は何もかも解決したと自分たちが思った頃、父さんに頭を下げてくれた。

「いや…こちらこそ…」

何がこちらこそなのか、分からないが父さんも頭を下げた。

こうして何もかもすべて終わったのだが、今思えば自分たちには長く、日では短かった…様な気がした。

それぞれの自宅にて

「今日は色々と迷惑かけたね…家の事とかばれちゃったけどさ、あれ？なんで二人はここに来たの？自分何か家の事とか言ってたわけ？自分は駆けつけた藤木と咲希に疑問をぶつけた。」

「え…？そ、それは…」

咲希は辺りを見回すように目を動かし、助けを求めるように隣にいた藤木を見た。

「…お、お前が放課後、海藤と何かの話し合いみたいな事しようとしてたからさ、話の内容が気になって…」

藤木はそこまで言っていると自分の顔を見た。

「じゃ、じゃあ後つけて来てたの？」

自分は目を見開いて二人が何をしてたのか悟った。顔が熱いので赤面してるに違いない。

「ああ、探すのに苦労したけど…全部聞いて、見てた」

藤木は、ばれては仕方ないと思ったのか笑みを浮かべながらそう言った。

「ぜ、全部！？」

「そ、お前の家庭状況とか海藤の家庭状況とかね…あと、お前が泣き出した時海藤が抱き締めて涙止めてたシーンとかね」

藤木が調子に乗って来た。シーンってドラマじゃねえよ。

恥ずかしくなって俯いた自分を見て咲希が「ご、ごめん！真那！！」

あたしも色々聞いたり見りしたけど、心配で追いかけただけなんだよ！全然聞くつもりじゃなかったの…ホントにごめん！！」と咲希は言い訳をしているように自分でも聞こえたのか、最後は謝ってくれた。

「え？抱き合つたの？あの兄ちゃんと？そういえばさつきさ、姉ちゃん突き飛ばされた時にあの兄ちゃんが受け止めてたよな！」藤木の話聞いて喰いついて来たのは、やはり慶だった。こういう話題になると乗って来るからウザいんだよね。

だが慶だけじゃなく、いつもなら芽衣もこういう話に喰いつくのだが今は寝息を立てて眠ってしまっている。なので、圭吾がおんぶをしているという状態なのだが芽衣が重くなつたのか、苦痛の表情を浮かべている。

最後にこんな話題になると、海藤居なくてよかったかも…と思ってしまう。

海藤は先に自分の父さんと一緒に家に帰って行った。父さんの退職の話は無しにすると、海藤の父さんは明日塾に連絡してくれるそうだ。

その一言を聞いて父さんは「今日はお前たちのお陰で助かったからウマイものでも喰わせてやる」と言っただけで先に家に帰ってしまった。

だが、さっきの事を振り返れば自分たちのお陰でなく海藤のお陰だと改めて思い、兄妹が集結しても意味なかったか？でも、家族の絆というものが深まったんじゃないか。

海藤の父さんだって、海藤に言われた事に心を動かされたに違いはない。

明日、もう一回お礼を言おう。

皆はまだ自分と海藤の話で盛り上がっている。いい加減飽きると思うが、笑い声が耳に響くのも悪くないとも思いながら家に向かった。

「ただいまー！おかえりー！」

慶が何故か迎える側の言葉を言ったが、それは毎回の事なので皆それには触れなかった。

台所が近くなると魚を焼く匂いと味噌汁の匂いがした。

「魚だ！魚だ！」

慶がはしゃぐように言った。はしゃぐ慶を見て低学年に見えないと思うのは仕方がない。背も低め（芽衣も同じくらい）なのだ。これも一応、小学6年だと思っ頂きたい。

「おかえり。今日は焼き魚に豆腐の味噌汁にご飯だ」
父さんは笑いながらメニューを言った。

テーブルには炊きあがったご飯が人数分並べられていた。
あんな短時間でよくここまで出来たなあと感心してしまう程に。

「父さん、手伝おうか？」と自分は焼きあがった魚を人数分の皿に置く作業をしている父さんに言った。

「いや、もう終わるし座つてろ」

「待つてらんないよ、それに味噌汁だけだし」

自分は父さんの横に立って手伝い始めた。

準備が終わると皆がテーブルに着いた。

「芽衣は？」

「まだ寝てる」

圭吾が答え布団で寝ている芽衣を指さした。

「疲れたんだろう、芽衣は寝かせておこう」

着かれた事してないじゃん、と慶は呟いたが、それを無視し父さんは言った。

「今日は皆のお陰で助かった、ありがとう。あのままだったら、本当に辞めさせられるところだったよ、父さんは明日から仕事に復活する、だからまたいつも通りの生活になるから遅刻するな。とくに、真那はな！」

自分は何も言わずに頷いた。

話が終わると食べようと父さんが言い食べようとした。

その瞬間に慶が「父さん、姉ちゃんボーイフレンドが出来たんだよ」と言い出した。

父さんは興味を思ったのか身を乗り出してくる。

「違う！ボーイフレンドじゃない！その話から離れる！！」と自分はいながら慶の後頭部を叩いた。

「痛っ！！」と慶が後頭部を撫でながら言うと、父さんがワッハハと豪快に笑い出しその笑い声に吊られ自分たちも笑い、部屋中に響いた。

海藤家では。

「お帰りなさい…遅かったわね。夕飯出来てるわよ、それともお風呂にしましようか？」

大人しそうな声が静かな部屋で響いた。

「いや…今日は話したい事があってな」

海藤は父親と母親が部屋の中に入るのを確認すると自分も家中に入った。

自分がいては話が出来ないだろうと思い、父親を先に行かせたのだ。

「祥がまだ帰って来てないの」とリビングに腰を掛けて座ろうとすると、先に母親が口を開いた。

「祥ならもう帰って来てるさ、友達と遊んで遅くなったらしくてな。さつき偶然会ったんだ。先に帰って来てしまったんだけどな」

その話に母親は友達もう出来たのと安堵をついて言った。

「ああ、これから一生あいつと付き合ってくれるかもしれない」

海藤は二人の会話をドア越しから聞いていた。

さつき一緒に帰っている時に今日の事は何も話さないでと海藤は言った。

今日の事は親子二人だけの秘密だと。

何故そんな事言ったのか分からない。

だが、父さんが他人を殴ろうとしたなんて知ったら、母さんはどうするだろうと。

離婚なんて言われたら最悪で夫婦の絆を深めるどころか壊れてしまう。

「…話てるうちに、この人は暴力なんてしない人だと思った。お前が言ってた事も嘘じゃないのかもしれないって」
そう言い終わると父さんは母さんの顔を見た。

母さんは涙を流していて海藤の方からも啜り泣きが聞こえて泣いているのが分かった。

父さんは不器用なので母さんにハンカチを渡す事しか出来なかった。母さんはそのハンカチを素直に受け取ったのだ。

意外に鬼畜

翌朝、自分は珍しく遅刻せずに済んだ。

昨日のように自然と起きたわけではない。

家族以外の人間に家の外で大声で自分の名前を叫ばれたからだ。

それは、今から1時間半ぐらい前の事である。

自分は父さんの仕事復活で、また元の生活が戻ると思い何も考えずに熟睡していた。

いつも家の中は兄妹たちの声で響くのだが、今日は父さんすら眠っていた。

当然、自分の部屋も静寂に包まれていて聞こえるのは芽衣の寝息か、たまに廊下を誰かが歩く足音ぐらいだ。

だが、今日は違う音が自分の耳に入ってきた。

その音は家の中ではなく、外で聞こえているらしく自分は誰かがわざと、自転車か防犯ブザーを鳴らしているのかと思って気にも留めなかった。

数分経っても音は止まず、さすがにうるさいと思ったが、今度は突然音が止み叫んでいる声がした。

自分の家は他の家とは違い、人の声などはたいてい聞こえないのだが自分は、これは自分しか聞こえていないのか、皆が鈍いのかどっちかだと思った。

何故なら芽衣はまだ熟睡中で廊下では足音や声の一つもしないのだ。

「誰だ？近所迷惑だつて…」

起き上がって窓を開けようしたが、それが変な奴で事件に巻き込まれるような展開があったら大変だと思い、耳だけ傾けた。

「…う…どう…」

微かに聞こえたが、自分は何を言ってるのか、それが誰なのか分かった。

ガラッと窓を開けて下を見下ろした。

「か、海藤！！」

「よっ！」

そこには、海藤祥がいた。

制服姿で髪形も整っていて、昨日と同じ優等生という感じオーラを漂わせていた。

海藤は自転車に乗ったまま自分に挨拶して来て、顔には満面の笑みを浮かべていた。

「あっ！待ってて、今行くから！」

自分は廊下・階段を音を立てながら走り、玄関のドアを開けて海藤に歩み寄った。

「どうしたの？ってかなんで、自分家知ってんの？」

「いや、父さんがお前ん家調べてくれてさ」

「なんで調べてんの？」

「…朝…一緒に、行こうかなって思ってたさ…」

海藤は恥ずかしくなったのか、声を低くして言った。

「えっ？ホント？嬉しい！あ、でも自分早く起きれないからなあ…」
「いいよ、待ってる」

「ホントに！マジ嬉しい！！じゃあ家で待っててよ！うん、それが
良いよ！誰も何も言わないと思うしさ！平気平気！！」

「え…でも…」

自分は海藤の意見も聞かずに自分一人で納得した。

「あれ？でも、なんで自転車何かに乗ってんの？」

自分は家の中に入ろうとすると海藤が乗っていた自転車が目に入っ
た。

「あ、これ？お前起こそうと思って…呼鈴じゃ迷惑だし。これの方
が気づいてくれるかなあって…それで近くに倒れてた自転車借りて
た」

「人の物を勝手に借りちゃ駄目！それに音を出す方が近所中に迷惑
だよ！呼鈴の方がまだマシ」

幸い、今朝は皆疲れていて誰も起きず近所の人にも気付かれずに済
んだ。

なので、明日からは今朝のような事が起きないように自分は目覚ま
し時計をセットして、自分の力で起きなければならなかった。

海藤は「これから7：00くらいに進藤ん家に着くようにするよ。
だけど、もし起きてなかったら…」と言うと顔を近付けて来た。
「今度は抱き締めるだけじゃ済まさないからね？覚悟しといて」と
言っただけでこり笑った。

この一言を真顔で言われ、自分の脳裏に昨日の話が甦って来た。
こいつはドSだ。間違いない！

自転車を元にあった場所に置き、家に入ると父さん目の前にいた。

「父さん…」

父さんは、もう着替えていてが髪はボサボサで眠そうな顔をしていた。

だが、自分たちを見ると目を見開きもう目が覚めたといつてもよかった。

自分が外から出て来た事も海藤がここにいる事にも驚いているようで黙って海藤や自分の顔を見た。

「あ、父さん…海藤がね。一緒に学校行こうって言うてくれてさ。だからえっと…」

自分が戸惑っていると父さんが「…朝飯食ってないだろ？作ってやるから、食ってけ」と言い台所へ行った。

「上がった、さっきの言葉さ。海藤に言っただけだからさ」
「…おじやまします…」

こくつと頷くと海藤は戸惑いの表情で家に上がった。

台所では父さんが定番の味噌汁やご飯などが、もう用意されていた。

父さんは「遅刻するから、もう食って行け」と言った。

自分は海藤を座らせ、兄妹が起きる前に食べてと言い、自分も食べ始めた。

平常な一日

朝食をなんとか食べ終わり食器を片づけながら、父さんにお礼を言った。

「父さん今日はありがと！」

「…遅刻すんな」

相変わらず素直じゃないなとか思いながら昨日の事は父さんは許してくれているだろうし、海藤のおかげでまた仕事にも復活出来る事も父さんは分かっている。

自分は階段を一段跳びしながら部屋に向い、制服に着替えバッグを持って洗面所に行き、歯を磨き顔を洗って階段を降りた。

海藤も父さんに向かって「ごちそうさまでした、お邪魔しました」と言ったらしい。

玄関に行き「行ってきまーす！」と自分が言うと同時にドサツという音が2階から聞こえた。

きつと兄妹の誰かが起きて、ベットから落ちたに違いない。

「早く行こう！」

「ああ……ホントに無茶苦茶な奴だ」

海藤は自分の身勝手な行動を見てやれやれと首を振った。

そんな海藤の気持ちなんて自分は知る由もなかった。

「ねえ？昨日あの後どうだった？」

「母さんには昨日の事は何も話さなかった。言ったら家族が壊れる

んじゃないかって思ってた……さ」

「えっ？話さなかったの？」

自分は身乗り出すように言う。

「母さんに気持ちは伝えたよ。自分考えは間違いだって気付いたらしい」

「それはよかったね」

会話が進んだところで学校が見えた。

いつも門には先生が立っているのだが、今日は時間も早かった。

「あれっ？進藤と海藤じゃん。二人で登校？ラブラブだねえ」

そう言っただけなのは藤木だった。挨拶をしろと言いたい。

藤木は、もう教室にいるらしく窓から手を振ってこちらを見下ろす態勢だ。

何時に家出てんだと疑問を持ってしまう。

「違っつてばっ！友達の印みたいなもんだよ！ね？」

「えっ？俺はそんな事思ってたよ。逆に恋人の証でしょ？」

自分の問いに予想と違う事海藤は言ってきた。

いつの間に敬語になったのかとも思ったが、学校だからだろう。

このキャラは崩さないらしい。

さっきの戸惑いの表情など微塵もなかった。

だから、あの表情は父さんに会った時の表情と勝手に自分は決め付けた。

また、にっこり笑う海藤を見て自分は海藤からちょっと離れた。

「あっ！真那……！」

今度は後から声がして振り向くと、それは咲希だった。

「咲希、おはよ！」

「おはよ！どうしたの？珍しいね、遅刻しないで来るなんて…」
咲希は驚いたのように言ったが、隣にいた海藤に目が行った。

「もしかして、付き合ってたんの！？」

展開が早いっ！皆そう思うのか…さっきから門から歩いてくる女子の視線が痛い。

皆、自分を睨むように凝視して来る

そりゃそうだ、こんな美形が隣にいるんだから。

今日海藤は眼鏡をしていなくて、表情が分かりやすい。

女子には、無表情でもメロメロにしてしまう程なのに笑う顔など見せられたら、倒れる人すらいるだろう。

「そんなんじゃないよ！全然違うからねっ！アハハッ」

自分は恥ずかしくなり、二人を置いて教室へ向かってしまった。

「ま、真那！？」

咲希の声も届かず、二人は立ちすくんだ。

「あの…昨日は御免なさいっ！！家族の事なのに、話に入ってきて来ちゃって」

咲希は何を話していか分からず、昨日の話を話題にした。

「別に、いいよ。君らが言ってくれなかったら、どんな事になってたか分からないし。むしろ感謝してるよ。それに父さんも考え方変えてくれたしさ」

「そうなの？よかったね！」

咲希の言葉に海藤は笑みを浮かべ、深く頷いた。

「行こう。遅刻するよ」

立ち話を済ませたところで海藤は歩きだした。

「うん」

咲希も追い駆けるように海藤に続き、教室へ向かった。

その後、真那が先生に遅刻しなかった事を珍しがられ、クラスの女子に海藤とはどういう関係かなんて聞かれ、その答えを海藤が友達以上・恋人以上の関係なんて答えてしまい、クラス中がパニックになった事は言うまでもない。

告白！？と母からの手紙

「疲れた〜！この疲れは全部、海藤のせいだ！！」

今日は自分のに平常な1日が戻って来てよかったなんて思っていたが、海藤と親しくなったからか自分は色々嫌味などを言われたのだが、誤解を招かないように海藤の言葉を全否定したかいがあつて、女子軍はただの友達として解釈してくれた。

今は、もう放課後である。

海藤は「付き合っていないなら、一緒に帰ろうよ」と誘われていたが、自分たちと帰ると言つて断つてしまった。

女子がまた睨んで来た。

1日に何回も睨まれると自分ってこんなに嫌われてたか？と考えてしまう。

「皆、疑い深いね」

もつと誤解を招く事を言つた海藤は、涼しい顔をしている。

「海藤も人からかうの好きだな。俺もだけど」

他人事のように言い、笑みを浮かべながら藤木が言つた。

「でも疑い晴れたんだから、よかったじゃない」

咲希が励ますように言ってくれた。

「まあ、そうなんだけどね…海藤、あんた人をからかうのもいい加減にしてよね！」

「からかってないよ？自分の気持ちを正直に伝えてるだけ」

海藤の言葉に自分の頭に？が出た。

「…もしかして、告白してたの？」

藤木が間を置いて言った。戸惑いの表情が声に出ていた。咲希も藤木の一言で赤面した。

海藤は藤木の質問には答えず笑みを浮かべるだけあった。

空気が重くなり、今の状況を理解した。

「な、何言ってるの！？そんな事ある分けないじゃん！」

誰が見ても人をからかっている様にしか見えないのに、あれが告白なんてありえないだろ。

それに告白は「好きです。付き合ってください！」とストレートに言うのが普通だ。

海藤は笑みを浮かべたまま話そうとせず「皆、じゃあね」と言いながら、それぞれ家に帰った。

何故、海藤は黙ったのか分からないが否定しなかったのも疑問に残る。

「ただいま」

玄関に入るとリビングが何やら騒がしかった。

「皆どうかしたの？」

「どうしたもこうしたもないんだよっ！これ！」

自分が今の状況を訊くと慶が興奮した表情で一通の手紙を渡して来た。

その手紙は、父さん宛で進藤道重様と丁寧に書いてあった。この手紙がどうしたのか。

送り主を確認すると、舞子と名前だけ書いてあった。

「…舞子って…」

それは母さんの名前だった。

周りを見回すと兄妹、皆信じられないといった顔だが、父さんの姿はなかった。

慶がまた口を開いた。

「母さんが戻ってくるかもしれない!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6633h/>

大人の本音

2010年10月21日11時21分発行